

原田裕規の写真の壁

Photography

原爆の図 丸木美術館

2019年2月2日（土） - 3月24日（日）

9:30 - 16:30（3月1日以降は9:00 - 17:00）

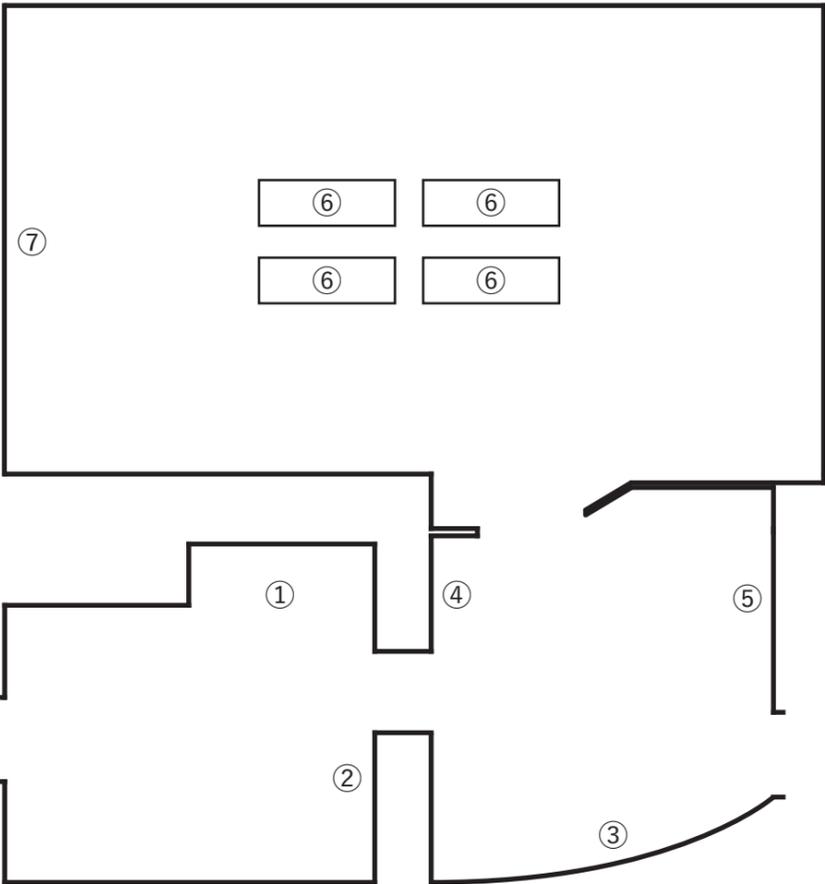
主催：公益財団法人 原爆の図 丸木美術館

助成：公益財団法人 アイスタイル芸術スポーツ振興財団

ロゴデザイン：北岡誠吾

インストール：コ本や honkbooks

照明デザイン：伊藤啓太



*撮影可能（接写はご遠慮ください）

*展示中の写真にお心あたりのある方は美術館スタッフまでお声がけください

①

〔資料〕写真の山（仮）

2017年 - 現在

推定およそ 50,000 枚の写真およびアルバムほか、サイズ可変

さまざまな経緯で「捨てられるはずだったアルバム」が、回収時に置かれていた状況を再現して陳列されている。

②

エンドロール

2019年

紙にレーザープリント、660×477mm

アルバムの余白や写真の裏面に書き遺された「キャプション」が、映画のエンドロールを模してレイアウトされている。

③

心霊写真 #1

2018年

写真・マット・フレーム、633×906mm

④

心霊写真 #2

2018年

写真・マット・フレーム、633×906mm

⑤

心霊写真 #6

2019年

写真・マット・フレーム、633×906mm

本シリーズでは、フレーム（額縁 | 枠組み）を過剰に大きくすることによって、それを「選ぶ」ことの暴力性が強調されている。またその行為は、撮影者不詳の作品を「除霊」するようであり、芸術作品としての「靈感」を高めているかのようでもある。

⑥

〔資料〕写真の山（仮）

2017年 - 現在

推定およそ 50,000 枚の写真およびアルバムほか、サイズ可変

ここに集められている写真のほとんどは「捨てられるはずだった写真」である。

写真を回収し始めたきっかけは、不用品回収業者や産廃業者らによって日々回収されているゴミの中におびただしい数の写真が含まれており、引き取り手もなく捨てられているという話を聞いたことだった。

その実情を確かめるべく業者を取材してみたところ、実際にはゴミとして捨てられているものの中から「売れるもの」と「売れないもの」とに選別されており、前者は市場に出され、後者は廃棄されていることがわかった。そこで、許可を得て捨てられる写真を預かることになった。

そうして、一度は廃棄されるはずだった写真を回収した当初は、一枚一枚をきちんと小袋に分け、分類し、ナンバリングを施し管理していた。しかし、協力してくれる業者が増え、引き取る写真の量が増えていくにしたがって、作業は限界を迎えるようになった。

その結果起きたことのひとつは、自らの身体の変容である。これらの写真は、その回収の経緯から、多くの故人の姿を収めていると考えられている。その中でも 20 世紀に生まれて近年亡くなった人々は、生まれてから亡くなるまでのほぼ全年代にわたって物理的なイメージがのこされることになった稀有な世代である。そうした人々の全イメージを、写真を通じて追体験しているうちに、その人の存在が脳裏に焼き付き、知らない人が夢に出るようになった。

ところで、アートの文脈で「ファウンド・フォト（発見された写真）」と呼ばれている手法がある。これは、芸術以外の目的で撮影された写真を芸術的な観点から「発見」し、それが置かれる文脈を書き換えることによって、写真の見え方を変えてしまうという手法である。その結果「芸術作品」という視座は得られるかもしれないが、その代償に、第三者の内面に焼き付いてまでこの世に残存してしまう人間の存在感は失われてしまうことだろう。

しかし、この写真の山はそれとは反対に、ある時代の日本で生きた人間の存在感を今に伝えている作品未満の何かなのである。

⑦

写真の壁

2019年

写真・磁石・木材、5460×1820mm

本作は「〔資料〕写真の山（仮）」の一部を使用してつくられたインスタレーションである。

使用する写真は、傷がつかないように磁石によって固定されている。高さ6メートル近い「壁」の下から上にかけて、写真のレイヤーは多層化しており、下部では1層程度だったそれも上部では5層程度に厚みを増しているのが分かる。

印画紙の丸まる力は強く、ところどころ、磁石によって押さえ付けられていない箇所の紙がめくれ上がるさまは、まるで重力に逆らっているかのようだ。

「壁」は垂直に立つことによって重力に打ち勝ちながらも、写真の丸まる力がいざれ磁石の磁力に打ち勝ったとき、写真は「壁」から自由になると引き換えに、重力に負けて地面に落下することによって「捨てられる」運命にある。

本作における磁石は、このように重力へ「打ち勝つもの」と「打ちひしがるもの」の間にあるものを象徴している。展示が終了するとともに磁石は取り除かれ、膨大な数の写真は再び「写真の山」へと戻される予定である。